NPO 法人日本ファイバーリサイクル連帯協議会
〒260-0001 千葉市中央区都町 3-14-10
TEL/FAX:043-234-1206
E-mail jfsa@f3.dion.ne.jp
URL https://jfsa.jpn.org

会報63号 2024年2月

第 83 回送り出しコンテナ積み込みは 23 トン 528 キログラム積むことができました　　2023 年 10 月 19 日ＪＦＳＡ千葉センター
招日したＰＪＣカユーム氏（後列中央）、ＷＡＳワジド・アリ・シャー氏（前列左）も参加

◆◇JFSA ホームページ Facebook インスタグラムもごらんください◇◆

JFSA HP　JFSA Facebook　JFSA インスタグラム

【アル・カイールアカデミー近況報告】

海外事業担当事務局　依知川　守

アディール君

家族で借りている店で野菜を売る

昨年9月にアル・カイール・カレッジを訪問した際、アディール君という男子生徒に会いました。その時はインタビューできませんでしたが、今回PJC代表カユーム氏の協力で、リモートインタビューすることができました。

アディール・アフマッド
（アル・カイール・カレッジ商学科1年生）
家族　母親　姉妹2人　兄弟3人
父親はハムダルト大学で雑用係として働く

Q. あなたはアル・カイールの第3分校（生徒数600人）に10年生まで通いました。入学は何年生でしたか？（※アル・カイールには様々な事情で途中から入学してくる生徒もいる）また学校までどのように通いましたか？

「1年生から入学しました。学校には歩いて通いました。私の家から学校まで約20分位です」

Q. 第3分校からは数名がカレッジへ進学したと聞きました。何人ですか？

「3～4人ですが、私のクラスでは私だけです」

Q. ・アル・カイールアカデミーでは、家庭の事情や仕事をするために中途退学する生徒が多いと聞いています。第3分校ではどうでしたか？

「第3分校も、1年生に入学して10年生まで残るのは40～50％位だと思います」

※カユーム氏の補足説明「第3分校周辺の女子生徒は第8分校（女子校）が開校したため今はそちらへ通っています。この地域はバローチ人が多く、進学しない女性は部族の慣習により15～16歳で婚約や結婚をすることが多いです」

Q. カレッジへ進学しなかった友人達は今、何をしていますか？彼らは別の学校へ通っていますか？働いている場合、彼らはどのような仕事をしていますか？

「進学しなかった生徒のほとんどが工場労働や様々な日雇い仕事、店番、ガードマンなどの仕事をしています」

Q. あなたの「カレッジへ進学したい」という決意に対して、ご家族、特にあなたの両親は何と言いましたか？

「両親共に喜んでくれました」

Q. あなたはカレッジへの通学に使うバイクを買うために、1年間働いてお金をためたそうですね？

「私の家からカレッジまでは6kmあるため歩いて通うことはできず、バイクが必要でした。私は在学中から、家族で借りている小さな店で野菜を売り、25ヶ月で2万5千ルピー（約1万2500円）貯めて中古のバイクを買いました。今も学校が終わってから16時以降は店で働いています」

Q. ・あなたがカレッジへ進学したかった理由は何ですか？また好きな科目は何ですか？

「事業についての知識を身につけたかったからです。科目では経済が好きです」

Q. カレッジを卒業後、あなたは進学しますか？

「はい、進学します」

Q. あなたの将来の希望は何ですか？

「自分で何かしらの事業を立ち上げ、成功させることです」

Q. あなたの卒業した第3分校では今年1月にスポーツの大会が開かれました。このようなイベントについてあなたはどう思いますか？あなたが在学中はありましたか？

「運動会は素晴らしかったです！私の在校時もアリ分校長の尽力で、勉強と合わせて多くの行事が開催されました」

Q. スポーツ以外にも、学校では何か定期的なイベントがありましたか？

「在学中は絵の創作や文章表現の展示発表会、アースデイなど、季節ごとに様々なイベントが開催されました」

Q. 1年生から10年生まで、あなたはアル・カイールにどんな思い出がありますか？

「私には、愛と思いやりをもって私たちの未来を明るくしてくれたアフマド先生、ナヴィード先生、そして特に皆から愛されているアリ分校長との思い出がたくさんあります」

Q. アル・カイールで学んでいるあなたの後輩達に、どのようなメッセージを贈りたいですか？

「教育はすべての人にとって必要なものです。学校で時間を無駄にしないでください。その時は二度と来ません」

本校で行われた研究発表会

本校の生徒による、周辺地域の清掃活動

生活困窮家庭への支援　　本校と第６分校周辺地域の住民を対象に(生徒以外の家族も含む)、屋台の手押し車や内職用のミシンなどを無償で供与しました(資金はアメリカのＮＧＯが拠出)　これまで屋台で商売をする人は、手押し車を１日 50～100 円程で借りていたそうです。販売品目にもよりますが、１日 500 円程度が利益の目標とのことです。学校での給食や食料支援も継続されています。また、３月 10 日頃から始まるラマザーン(断食月)の間は、更に多くの食料支援が行なわれます。

スポーツ大会　　今年１月、第３分校のグラウンドで開催され、第３分校と第８分校の生徒が 10 数種目の競技に参加しました。今後は他の分校の生徒も同様に大会を開催する予定です。また第３分校と第８分校では護身術としてマーシャルアーツ(武術)の授業が始められました。

招日報告

【メンバー】アブドゥル・カユーム氏（ＰＪＣ代表）　ＰＪＣ：パキスタン＆ジャパンカンパニー

ワジッド・アリ・シャー氏（ＷＡＳインターナショナル（以下ＷＡＳ）代表）

【期間】2023 年 10 月 10 日（火）～26 日（木）

※アブドゥル・カユーム氏は 10 月 7 日（土）～9 日（月）のアジア民衆基金定期総会・交流企画にも参加

２０２３年初頭からの輸入規制により、パキスタンへ衣類等の輸出が出来なくなりました。ＪＦＳＡはＰＪＣと相談し、ＷＡＳ(タイを拠点に衣類等のリユース販売事業を展開)の協力を得てタイへこれまでコンテナを４回輸出しました。現地で実際に販売を行なう中で課題を確認し、改善を重ねながら事業を進めています。今回は日本ーパキスタンータイを結ぶ事業を更に推進するために、お二人を日本に招日しました。

滞在中、お二人はＪＦＳＡの活動や協力団体の皆さんとの交流企画等に参加し、日本での活動に直接触れていただきました。また同時にタイでの課題や今後の方針について、参加者の皆さんと共有することができました。

生活クラブ生協・東京

ワジッド・アリ・シャー氏から

日本での滞在では皆さんにとてもお世話になり感謝しています。ＪＦＳＡや九州のグリーンコープも含め様々な協力団体の活動現場を直接見たり、皆さんとたくさんお話しができました。皆さんがパキスタンの子どもたちの支援に参加されていることが分かり私たちはとても嬉しかったです。私自身もアル・カイールの子どもたちの支援に繋がるこの事業に継続して関わりたいと感じました。今後は更にＪＦＳＡ、ＰＪＣとの協力関係を強くし、私たちの販売事業を発展させたいです。

滞在中はＪＦＳＡの第 83 回コンテナ送り出し(タイ)にも参加しました。お昼にはＪＦＳＡのメンバーが作ったパキスタンカレーを皆さんと一緒に食べたのですが、とても美味しかったです。実は私は故郷のパキスタン北部の村の貧しい人々へ食料支援などを個人的に行なっています。そこには親が失業していたり亡くなってしまったために、学校へ通えない子どもがたくさんいます。いつかチャンスがあればそのような村にも学校を作りたいです。

パルシステム千葉　館山センターまつり

←グリーンコープ生協

↓パルシステム茨城　栃木　土浦館

↓千葉県立千城台高校

タイ派遣報告

派遣目的　販売状況の確認　市場調査　海外輸入古着買い付け
期間　2024 年 1 月 6 日～16 日　田邉航太郎　9 日～16 日　古田真大

○販売状況の確認

これまでの首都バンコクやカンボジア国境の街アランヤプラテートにあるロンクルア市場での販売では、冬物衣料や毛布、シーツ、カーテンなどの需要が無いことがわかりました。そのため情報を集め、バンコクから北へ約 720 ㎞離れた山岳地域にあるタイ第二の都市と言われるチェンマイでは冬に気温が下がるためそれらの需要があることがわかりました。チェンマイでは、タイでの販売協力者であるＷＡＳ代表ワジド・アリ・シャー氏と長年付き合いのある古着事業者のミエン氏の協力を得て、過去に送った分も含めてそちらで小売業者に販売しました。小売業者からはバッグや靴、ワンピースが特に好評で、すぐにでも追加してほしいとのことでした。今後も推移を確認していきます。

○市場調査（チェンマイ）

市街地郊外に日本から輸入した古着や中古の食器や家具などを販売する事業者が増えているとのことで、それらの店舗を視察しました。店舗では一般客への小売り販売だけでなく、市街地や周辺地域の小売店への卸売り販売も行なわれているとのことでした。市街地での小売販売は、店舗だけでなく各地で開かれているマーケットで露店でも多く売られていました。

○海外輸入古着買い付け

バンコクのフリーゾーン（自由貿易地域＝通関規制や関税に優遇措置が与えられている地域）にあるワジド・アリ・シャー氏の倉庫で、輸入古着の買い付けを行ないました。ワジド・アリ・シャー氏はアメリカやヨーロッパからパキスタンに輸入された古着を買い付け、タイに輸入して卸売り販売を行なっています。タイ国内だけでなく日本や韓国、中国、台湾など様々な国から訪れるお客さんを相手に、20 年以上事業を営んでいます。また、15,000 軒以上の店舗や露店が軒を連ねるバンコク市内最大の公設市場、チャトチャックマーケットにも店舗を構え、小売販売も行なっています。

チェンマイの郊外、幹線道路沿いにあるワジド・アリ・シャー氏と
ミエン氏が共同で借りる倉庫

1.13 ㎢の広大な敷地に所狭しと店舗が並ぶチャトチャックマーケット
週末のみ開かれるこちらの市場には、多くの地元民や観光客が訪れる

およそ 400 万人のイスラム教徒が暮らすといわれるタイでは
ハラールレストランが多い
こちらはフライドチキンと牛のテールスープ

フォトギャラリー「スライ　カルハナ」

縫製工房の“チャエケサート”（チャイを飲みながら会話を楽しむ）

派遣中のＪＦＳＡ事務局（手前の２人）がパソコンで写真を見せる

سلائی کلہانہ

意味　縫製工房

ＪＦＳＡのオーダー品を作る

karikhana
縫製工房の閉鎖にあたって

東葛センター事務局　佐々木 貴弘

昨年11月の第21回ＪＦＳＡ定期総会の承認をもって縫製工房の閉鎖が正式に決定しました。

約2年半前に担当するようになってから、閉鎖を決めた頃、そして現在も、あの時こうすれば良かったのではないか？もっと出来ることはあったのではないか？そう考えない日はありません。閉鎖の方針が出てから、皆様への説明も不十分だったかもしれません。「力不足だった」今はそれ以外の言葉が見当たりません。

現地で請け負う仕事はほとんどなくて、実質的にはＪＦＳＡの専属的な工房になっていた、連帯事業の理想には程遠く、日々重なる費用もあって互いに疲弊する状態に陥ってしまっていた、理想は美しくても最低限の品質が伴っていなければ、商品として通用しない現実も痛感しました。

これらについては理事会をはじめ様々な場面で何度も何度も議論しました。一旦お休みという形はどうかなど色々なご意見やご指摘もいただきました。しかし、このまま経営を圧迫し続ければ、事業の継続はおろか教育支援も危うい状況になってしまう最悪の事態を避けるためには、閉鎖の決断をせざるを得ませんでした。この失敗と教訓をしっかりと刻んで、今後も新たな道を模索し続けたいと思います。

応援と期待の言葉、時には叱咤激励も交えながら支援してくださった皆様、長く縫製工房で働いてくれたスタッフたちに感謝するとともに、とても残念な結果となってしまったことをお詫び申し上げます。

結婚、引越、親の介護などで工房から離れたスッタフも多い

伝統のアジュラク染めで有名な街ハラーを研修で訪問
手に持っているのはアジュラク染めの木版

PJC代表カユーム氏からのメッセージ

工房のメンバーのその後についてご報告します。検品等を担当していたアーディルさん(男性)は、大きな縫製工場の輸出品の検品を担う会社へ再就職しました。縫製工房で日本と仕事を経験したことも採用に影響したと思います。機織り職人のファハッドさん(男性)は別の会社でカディ職人として働いています。ナスィームさん(男性)は自分の店を開き、男性の民族服を仕立てています。ナディアさん(女性)とフォジアさん(女性)は別々の縫製工場に再就職できました。工房のリーダーだったサルマさんは現在も就職活動を続けているそうです。3人の女性には工房で使っていたミシンを贈りました。そうすれば彼女達は家で内職ができるからです。

私自身は縫製工房の立ち上げから関わりました。工房での日々の活動は、日本の皆さんが求めている品物をどのように作り届けるか、皆さんとの関係をどのように築くことができるのかなど一つ一つが学びでした。注文をしてくださる皆さんを始め様々な繋がりを強く感じていたので、工房の活動を終了することはとても残念です。しかし工房メンバーや日本の皆さんとの繋がりは、家族や兄弟以上のプライスレスな存在だと感じています。

私たちは縫製工房事業で大きな利益を作れませんでした。しかしこの事業は私たちを成長させるための大切な道だったと思います。今後、私自身はPJCを基盤にJFSAと協力して衣類等の販売事業を継続します。まずはPJCの事業を大きくして、いずれは学校の卒業生やスタッフとの繋がりの中で、再び働く場を作りたいと考えています。

カユームさん（左）　サルマさん（右）

左から娘　息子　お母さん　サルマさん

縫製工房リーダーのサルマさんにインタビュー

Q 縫製工房という場や、メンバーとの繋がりは、あなたを含め女性たちにどのような意味がありましたか？

「縫製工房は貧しい女性のために作られました。（他とは違い）私たちの工房は給料を得るために働くだけでなく、お互いの家族の問題や病気などについても、気遣い支えあっていました。メンバー同士が家族のように関わり、協力し、尊重しあうことができました」

Q 縫製工房であなたや工房のメンバーは何を学びましたか？

「私たちは自己管理を学び、また日本の社会について知る機会を得ました。私たちは世界の大国である日本と仕事をすることができることを誇りに思いました」

Q 今後、あなたはどのような仕事をするつもりですか？

「私の子どもたちの未来を明るいものにするために、自分の事業を立ち上げたいと考えています」

Q 最後に日本の皆さんへメッセージをお願いします。

「皆さんと一緒に働くことができ、とても感謝するとともに、皆さんのご清栄を願っています。私は縫製工房の活動を通してたくさんのことを学びました。日本の皆さんのおかげで平和な雰囲気の中で仕事ができ、私たちは自信を得ることができました。私はいつか将来、皆さんと協力して支援の必要な貧しい女性のための工房を設立したいと考えています」

『育つ』

東葛センター担当事務局　田邉　航太郎

２０２３年10月より、１年半アルバイトスタッフとして勤めていた古田真大君が事務局になりました。いわゆるバイトから正職員へというのは良く聞く話ですが、こうした形で事務局になるのは２０２５年で設立30年になるＪＦＳＡで初めてのことだと思います。そんな彼は現在25歳なので、ＪＦＳＡは彼が生まれる前から活動していることになります。そう言うとずいぶん長い時間だと思います。

ＪＦＳＡは、子どもたちが教育を受けて成長する場である学校を支援しています。長い時間の中で、その子どもたちが成長していく様子を見てきました。学校を卒業後、大人になって家族を持ち、その子どもがまた学校に通う様子なども見てきています。そういう卒業生と会って話をしたとき、頑張る力をもらえるように感じます。

それと同時に、自分たちが組織として、またその一員である個人として発達や発展、成長ができているか考えます。組織的な成長と言った場合は経済規模や働くスタッフの人数、回収量、輸出量など、数値化して計りやすいことが多いです。同様に個人としての成長といった場合、技術や知識といったことは計れますが、内面的、精神的な成長は計りづらいことが多いような気がします。

そもそも成長とは何かを辞書で引くと、『人、動植物が育って成熟すること。育って大きくなること』とあります。さらに育つという言葉は、『巣立つ』、『添い立つ』などといった言葉が転じたものと言われているそうです。「育つ」であれば、助けを得て独り立ちできるようにする、「育てる」であれば、独り立ちできるように寄り添う、ということではないかと思います。そして独り立ちの先には立てない人の支えになるということがあると思います。つまり個人的な成長が計りづらい部分に関しては、自分が誰かの支えになれているかをよく考えることで、計れはしなくても感じられるのではないかと思いました。

ＪＦＳＡの活動目的には、育つことが大きくかかわる「スラムに暮らす子どもたちの自立支援」や「非営利の市民活動としての自立」という２つがあります。この目的の達成度合いについても、やはり数だけでは計れないことが多くあると思います。30周年という節目を来年迎えるにあたって、よく考えていきたいと思います。

タイで輸入古着の買い付け作業を行なう古田君
普段カプレで接客をすることの多い彼が、お客さんに届ける商品を自分で探します

カプレで取り扱う絨毯をパキスタンで販売しているアサムトラー氏（右）　彼の一族は500年この商売を行なっているとのこと　ＪＦＳＡはまだまだですね！

「百聞は一見にしかず」

国内事業担当事務局　入江　賢治

２０２３年２月、第80回古着送り出しで初めてタイにコンテナを輸出し、これまで計４本をタイに送りました。輸出先はそれまでパキスタンだけでしたので、この１年間はタイの古着マーケットの需要を知り、それに合わせてセンター業務の見直しをスタートする年となりました。

私は２０２３年10月にタイ視察に行き、チエンマイではＪＦＳＡの送った古着を買い取り、販売しているタイ人ヴィー氏の倉庫兼店舗を見学しました。ベールから開封された古着は一点一点ハンガーにかけられて、値札を付けて綺麗にラックに陳列されていました。その様子はまさに「百聞は一見にしかず」で私は大きなインパクトを受けました。

ＪＦＳＡが送った古着が実際に小売される現場とつながり、それはダイレクトに「私たちの古着の良し悪しの評価」を受けることになるからです。買い手の望まないもの（状態の悪いもの等）を送ってしまえば、ベールを開けた時にがっかりし、また買いたいとは思わないでしょう。私たちが送る古着は買い手にとっては「商品」だという事実を、より緊張感を持って感じることになりました。

ヴィー氏からはＪＦＳＡの古着の内容（状態やデザイン、ブランド等）の評価やタイの需要について、丁寧な説明を受けました。特にアイテムの種類分けについては「現状のままでは売れづらいですが、タイのニーズにマッチした分け方に変更すれば売るのは簡単です」と伺い、すぐにでも見直しに取り組まなければ！という思いを強くしました。

帰国後に種類分けの見直しを進め、タイでの需要に応えるためにアイテム数を20種類増やし72種類にしました。タイと日本では人気のある古着の需要が重なる部分が多いため、国内販売用とのバランスを取りながら、輸出用の内容が向上するようにしています。

良い内容のベールが出来た時には「これは早くベールを開けて見て欲しい！きっと喜んでくれるはず！」と期待しています。次回、タイに輸出した後には見直したベールのフィードバックを受け、更に改善点があればセンター業務に反映させたいです。

買い手の望む古着を送れれば、買い取り価格が上がり、ＰＪＣ（カユームさん）の事業を通した、アル・カイールアカデミーの支援を大きくすることに繋がります。そのことを目指して、ＪＦＳＡに寄せられた古着のより良い活かし方ができるようにすすめていきます。

ＪＦＳＡの送ったアイテムについて説明するタイのヴィー氏（右）、ＰＪＣカユーム氏（中央）、ＷＡＳアリ・シャー氏（左）

ジャケット類の仕分け・選別作業　輸出用は８種類、国内販売用は６種類に分ける

JFSA 千葉センター／CHARKHA BAZAAR（チャルカバザール）営業時間：10時30分～19時（木曜定休）
千葉県千葉市中央区都町3－14－10　　電話　050－3746－8684

第二十一回定期総会報告

2023年11月30日に第21回定期総会を行ないました。出席総数は129名（本人出席22名、委任状65名、書面議決書42名）で、議案はすべて承認されました。

1、2022年度事業・活動報告
2、2022年度決算報告・監査報告
3、2023年度活動方針案・予算案
4、役員の選出に関する件

2022年度の活動の概要（2022年10月～2023年9月）

●回収とP＆Jカンパニー（以下PJC）への送り出し

回収量は98・7トンで計画の約76％でした。会員・支援メンバーの方からは延べ1382人（約11・3トン）回収協力がありました。

PJCには3回の送り出し（合計75・8トン）を行ないました。パキスタンでは2022年10月以降、古着輸入の関税が大幅に引き上げられて事業利益がみこめない状況になったため、PJCのカユーム氏と協議し、昨年度に市場調査を行なったタイに輸出しました。タイでは、カユーム氏の知人のパキスタン人で、タイの古着卸会社WAS代表のアリ氏の協力を得て販売をしました。PJC、WAS、JFSAの3者は対等な事業パートナーとして、経費を引いた販売利益は等分することとしました。

●PJCとの事業連帯の推進とアル・カイールアカデミーの自立支援

輸入古着の販売事業は買い付けから輸入後の商品管理と仕分け、値付けなどを柏店で行ない、千葉店と密に連絡をとって各店舗で販売する仕組みを作りました。PJCでは、従来のパキスタンの物産品に加えて、パキスタンで小規模に流通する欧米古着の輸出取り組みを始めました。

縫製工房は、受注が少なく技術や生産体制の検証、強化ができず、運営が厳しい状態が続きました。そのためPJCと協議を重ね、工房の事業の継続は困難と判断しました。

●国内事業

①センター業務

・千葉センター　新たな輸出先のタイでの需要を業務にフィードバックし、選別・仕分け・梱包方法などの変更に取り組みました。選別や軒先市、送り出しを団体の協力で行ないました。

・東葛センター　輸入古着、国内回収の古着の管理をカゴ車で行ない動線・作業スペースを確保しました。在庫管理をカテゴリーごとに行ない、作業環境の改善に努めました。

②ショップ販売

・千葉店　CHRKHA BAZAAR（チャルカバザール）　売上目標を達成できました。子ども服の利用は順調に増えました。柏店と連動した輸入古着販売の仕組み作りに取り組みました。広報はSNS，チラシを活用しました。

・柏店　kapre（カプレ）　事業者への卸売りが減って予算達成率は97％（前年比98％）でしたが、個人客の利用は増えました。現状の把握、労働環境の課題整理に取り組み、スタッフの役割を明確にして解決に努めました。

・街商販売（フリーマーケットなど）　人員体制、商品の在庫状況を判断しながら出店しました。

・販売協力団体　二つの団体で回収への協力を呼びかけました。回収取り組み、目標達成が難しい団体での委託販売を終了しました。

・市民活動と連動した企画　三つの協力団体の企画に参加しました。東葛センターで3年半ぶりにバザールを開きました。

●広報活動と会員の参加

会報3回、回収案内3回を発行しました。個人1401人と19団体の皆さんが会員として活動を支えました。コンテナ積み込み、案内発送、選別、販売にボランティアが参加しました。協力団体の企画で、選別体験、オンライン報告会を実施しました。

●研修

パキスタンの洪水被災復興支援活動の内容を深めるために、庄ゆた夏さん（シラキュース大学建築学院准教授）を講師にお招きして、ルワンダの農村復興の実践報告をしていただきました。

●多様な団体との交流

団体会員はじめ協力団体などから回収やコンテナ送り出し、選別体験会、報告会などに協力をいただきました。

●アル・カイールアカデミーの教育・連帯事業に関わる人々との交流

事務局2名をパキスタンに派遣しました。団体会員の職員の方が2名派遣に同行しました。招日の準備をすすめました。

●危機管理の充実

国内事業の危機管理の充実に努め、海外派遣はリスクマネジメントに沿って実行しました。

●業務について

社会保険労務士と顧問契約を結びました。就業規則の改定に着手しました。

出席者の意見から

2011年から取り組みが続いてきた縫製工房の継続が困難となったことについて「スラムの女性の自立という目的に向けた取り組みの必要性は変わらないと思う。工房が終わるのは残念」という意見が出されました。事務局から「受注内容、事業規模、技術力などから、残念だけれども今のまま運営を続けることはむずかしいと、PJCと相談して判断した」とホワイトボードを使って詳しく説明がありました。

総会後の交流会　テーマ「JFSAとPJCの連帯事業　今とこれから」

アル・カイールアカデミーの運営を支えるためのPJCと連帯した事業の現状について、担当事務局がタイの販売事業の報告を行ないました。タイとパキスタンの古着需要の違い、出会った古着業者の人たちとのつながりなど、動画や写真で情報が伝えられました。

監査報告

私たち監事は2022年度（2022年10月1日から2023年9月30日）の当会の事業と活動および決算と会計諸表について11月10日に監査を実施いたしました。その結果、当会の事業と活動は総会の決定に基づいて滞りなく遂行され、決算と会計諸表は法令および定款に従い適正に処理されていることを確認いたしました。

2022年度は、古着類の回収実績は年度計画の130トンの計画に対し約98.7トンの実績で計画を下回りました。回収量の76%は協力団体からの回収でした。

回収受付は3回の期間を設け、参加者はのべ約14,000人でした。前年に比べ約2,800人減少しました。国内全般の古着回収率が減っているとの情報もありますが、2年連続で参加者の減少が続いている事について、様々な情報発信を行い参加方法の構築を進めていく事が大切です。

今年度はパキスタン輸入関税の影響もあり、ＰＪＣと協議のうえタイへ3回の送り出しを行なうことが出来ました。送り出しの量は75.8トンとなりました、これまで回収していた品目と違った需要がタイにあることも調査から見えてきました。今後も引き続き調査を行い需要の高い品目を幅広く回収協力できる広報、工夫に取り組んでいただきたいと思います。

販売事業では、売り上げ予算を達成することができました。ショップの来客数は減少傾向ですが、売場のリニューアルを行った結果これまでより家族連れ、三世代での来店数が増えるなど来客数の裾野が広がったことは明るい兆しです。今後も売場の工夫や施策を行い来客増に向けて取り組んでいただきたいと思います。

事業全体では9期連続黒字を達成することが出来たことは大いに評価されるべきだと思います。

kar-khana事業では縫製工房で年間を通した稼働や受注を計画どおり行う事が出来ず縫製工房を撤退する判断をしました。今後の体制や経営状況を見越した正確な判断だと思います。

個人の会員は増加しましたが、支援メンバーは減少しました。会員・支援メンバーの増加は活動支援の輪の広がりでもあります。今後も会員増を目指す広報の取り組みを積極的に行うことをさらに期待します。

広報活動では会報を外部委託し、見やすい紙面づくりに取り組みました。また新型コロナウイルスに対する社会情勢も変わり様々なイベントが再開された事によりＪＦＳＡの活動情報を広く伝える場が増えました。今後もイベント等での広報活動に合わせＳＮＳを中心とした新しい情報発信につて研究いただき情報発信に取り組んでいただきたいと思います。

危機管理の充実の働き方の改善に着手し、就業規則見直し等に社会保険労務士との契約、働く人一人一人がその在り方を考えるなど、継続できる組織作り、労働環境改善に向けての努力がうかがえます。今後の取り組みに大いに期待しています。

今年度は縫製工房の撤退、輸出先の変更など様々な変化が続きました。次年度に向けては、連続している回収量減少への対策や工夫を凝らした販売方法の構築、活発な交流活動を検討・実施していくことでＪＦＳＡの取り組みがさらに広く伝わることに期待しています。

ＪＦＳＡの活動の「価値」がさらに共感を得て広がることが出来るよう、役員、職員、会員の皆様や団体会員・支援メンバーの皆様一丸となって活動計画の達成に邁進いたしましょう。

2023年11月10日
監事　　増本　綾子
　　熊谷　浩二

●ＪＦＳＡの広報　フェイスブックの紹介●

←フェイスブックの
QRコードです

ＪＦＳＡのホームページには、フェイスブックも掲載しています。主に直近の活動や回収に関する情報を載せていて、今週あったこと、来週やることなどを写真と短い文章でお伝えしています。
フェイスブックはコメントや「いいね！」などのリアクションが見られるので、双方向のツールとして使っています。
ぜひお友だちにもシェアしてください！

ＪＦＳＡの 2023 年度の活動方針では広報活動を次のように進めることが確認されています。「広報活動を充実し、多様な人々の共感と協力を得ることを目指します」この方針は毎年ほとんど変わりません。「共感」は自分ごととして考えること、「協力」は手助けすることですので、広報活動は双方向であることを基本に考えます。

でも、ＪＦＳＡの情報を受け取る方たちと個別にやりとりができる機会は多くはありません。ですから、受け取った方のリアクション（回収への参加、会員の入会、お店の場合は来店や購入、Web サイトの訪問者数、SNS へのリアクション数など）で，発信した情報が目的にかなっていたかを考えます。電話やメールでいただく質問やご意見から気づくこともたくさんあります。

昨年は、いくつかの高校の生徒のグループから「探求の授業」のテーマで古着寄付を選んだので取材したいとメールがきました。情報は Web サイトで知ったそうです。そのうちの１つのグループは実際に校内で呼びかけて回収し、直接ＪＦＳＡに届けてくれました。メールや電話ではやり取りしていましたが、直接に会ったことで存在がとても身近に感じられました。

※右のフェイスブックで紹介している千城台高校は“知り合いの知り合いの知り合い”というご縁で出会いました！

2024 年 1 月 20 日フェイスブックに掲載の記事

【1/20(土)】千葉県立千城台高校の皆さんが JFSA 千葉センターを訪問されました。千城台高校では昨年の文化祭の時期に、剣道部を中心に衣類の回収に取り組んでくださいました。
また顧問の江澤先生の働きかけにより、今年は千城台高校周辺の中学校にも回収の取り組みを広げてくださっています。今回は剣道部以外の生徒さんも含めて来てくださり、衣類等の選別作業や、プレス梱包にも参加しました。
最後は出来上がったベール(50KG の塊)の緑のバンドに一言ずつメッセージを書いてもらいました。江澤先生も「一を以って之を貫く（いちをもってこれをつらぬく）」と論語の言葉を書き記してくださいました。
このベールは 4 月頃パキスタンへ到着予定ですので、現地でしっかり確認してご報告したいと思います！

■□2023 年度（2023 年 10 月～2024 年9月）の正会員・支援メンバーを募集しています

NPO 法人 JFSA の会員は次の2種類です。

1. 会員（正会員）この法人の目的に賛同して入会した個人または団体
2. 支援メンバー　この法人の目的に賛同し、賛助の意思を持つ個人または団体

【2022 年度　正会員　個人：181 名・団体 11　支援メンバー　個人：1220 名・団体 8】

会員・支援メンバーの方には、会報（年3回）、古着の回収のお知らせ（年3回）、サポーターグッズ（年1回）をお送りします。
正会員の方には総会議案書（年1回）もお届けします。

●年会費（10 月～翌年9月末）

個人：会員 5,000 円　／　支援メンバー2,000 円

団体：会員 50,000 円　／　支援メンバー　10,000 円

●会費振込み口座（郵便振替）

番号：00160-7-444198　口座名：JFSA

※活動への寄付にも同じ口座がご利用できます。

通信欄に「寄付」とお書き添え下さい。

◆JFSA の会報のバックナンバーをご覧いただけます◆

ホームページのトップページ中央
「JFSA のニュースレター（会報）」より
お進みください。ご希望の方には郵送もできます。

◆会報についての感想やご意見をお気軽にお寄せください◆

JFSA までメール・お手紙でお送りください。

jfsa@f3.dion.ne.jp

こちらのQRコードを読み取っていただくとメール作成画面になります